

## I 概要

本報告書は、農林水産省「平成 30 年度花き流通システム高度化・転換実証支援事業」の結果を取りまとめたものである。

近年わが国花き産業を取り巻く環境は厳しくなりつつある。従前に比して、サプライチェーン全体で効率的な対策を講じる必要性が増している。一般社団法人日本花き卸売市場協会では、平成 27 年度より、花き物流がかかえる課題を調査・議論し、以下のような 4 点にまとめ、課題解決のため、平成 28 年から様々な実証事業に取り組んできた。

- ・主要卸売市場間における幹線輸送の検討（横持輸送が実現できないか）
- ・サプライチェーン上の時間配分の見直し（セリの開催日時を見直せないか）
- ・日持ち性保持の問題（一貫したコールドチェーンをどのように確立するか）
- ・流通容器等の規格の問題（台車、段ボールやパレットのサイズを標準化できないか）

平成 28 年度は、切花の流通容器の標準化の問題を取り上げた。横箱乾式容器の標準規格を策定し、実証試験によりその規格が使用に耐えうるものであると判断し、花き業界に提案した。

平成 29 年度は、今一度、外部ロジスティクス専門家による物流上の問題点の洗い出しから行った。業界関係者だけによる議論では近視眼的になりやすいためである。現状の取り組みの方向性を客観的視点から確認した。第三者視点で調査することで、中長期的に花き業界が発展するためのロードマップを確認した。また、前年からの継続事業としては、容器・パレットの規格化とそのコスト低減効果を把握した。更に、標準化に関しては、パレット台車についても試作・検討した。

平成 30 年度は、花き流通システム高度化・転換実証支援事業として、鉢物における物流課題に取り組んだ。物流の標準化としては、鉢物物流に欠かせない台車の標準化である。鉢物の国内生産のピークが 2004 年、苗物は 2002 年であり、当時とは異なる出荷ロットや、物流に関わる人たちの年齢構成の変化もあり、小型で取り回しのよい台車に要望がかわりつつあるからである。また、生産地から小売店までの輸送と移動を一貫して台車で行う事から、鉢物（苗物）商品トレーと台車に I C チップを付けて、拠点間移動時に発生する検収業務を効率化する実証事業を行った。更に、産地集荷拠点を活用した効率的な共同出荷輸送の検証を行った。これらの効率化を実施するためには川上である生産地から情報の電子化が欠かせない事からソースマーキング（出荷段階での商品情報コードの付与）を行った。

これらを導入した実証試験から、物流フローの全体時間は大幅に短縮する結果となった。また、共同輸送により人員削減も見込める事がわかり、今後の花き物流に一定の指針を示せるものとなった。